巫女武者音声作品　台本

僕たちの街には、ある都市伝説があった。
山の中に、夏の、特定の機関だけ姿を現す洋館がある。
そのホールにある絵の前で願いを言えば、神様が試練をお与えになって、それを果たせば願いが叶うのだと。
果たして、それは本当だった。
夏休みに入ったばかりのその日。
補修終わりに僕、桜佳（おうか）は、親友の舞菱久遠（まいびし・くおん）と、付き添っていた友人二人と共に、絵の世界へ呑み込まれてしまった。
その世界では、僕たちのような現世の人間は霧人（きりびと）と呼ばれている。
女神様から力を与えられ、願いを叶えるための使命を見付け、それを果たす為に、僕たちは剣を取った。

はい、ガルム種の牙と体毛。
残りはこの袋に入ってるから。
へへっ、ありがと。（金の入った袋を受け取った）
あれ、報酬金額ちょっと増えた？
ふーん、毛皮が高騰してるんだ。
うん？（呼び掛けられて振り向く）
アンテンタ第六衛兵長。
そろそろ家を買いたいな、って思ってお金貯めてるんです。
ほら、もうここに来て半年になるわけだし、いつまでも宿住まいって訳にもいかないでしょ？
えっ。他の三人？
宿の部屋に居ないんです？
うーん。京佳（きょうか）と夏喜（なつき）は、二人で輸送依頼とか行ってたけど。
どこだっけ、届け先の街。
ああ、クートチャーメだ。
良いなあ、南国。
僕、そこには行った事なくて。
あ、んんっ（咳払い）
荷物は届いたんでしょ？
だったら、どっかで遊んでるんですよ。
夏喜は水泳部だし。
ああ、泳ぐのが得意な人の集まりです。

それで久遠は。
え、二日前に仕事を受けた？
どれどれ。
オーガ種の幼体が目撃されたから、周囲の偵察と発見した場合の駆除、か。
オーガ種ごとき、久遠なら一人でも手こずるような相手じゃないけど。
近隣の村人に壊れて護衛を引き受けてる、ってのはありそうだけど。
ふむ。
じゃあ、ちょっと見てこよっかなー。

<威勢良く太刀を振るっている>
十九、二十！
うおおおおっ！
これで纏めて、二十五！
どうだ！
オーガと言っても、そこらのトロール種と変わらないなあ。

<拳を太刀で受け止める>
はっ！
そんな殴打じゃあビクともしないなあ！
僕はねえ、ただデカいってだけで圧倒できるような、雑魚共と違うんだよお！
分かったかよ！　バケモノ共！
（斬撃を終え、一息吐く）
逃げたのか。
へえ、命を惜しむ知能があったのか。
（冷たい笑み）
まあ、逃がさないけどさ。

<余裕な声。うーん、の部分は伸びをしている>
三分で三十七体。うーん、上々。

<バケモノの残骸を踏み付けている>
ふん。
精霊のなり損ないが。土に還れるだけメシと思え。
しかし、想定より数が多いな。

ここまで数が居るのはどこかに巣がある証じゃないか？

<凄い棒読みで>
あれれー、これはなんだー？
わー、何ということでしょう。
うっかり殺し損ねたオーガの血の跡が、向こうまで続いているではありませんか。
巣を見付けちゃったらー、潰しちゃわないとなあ。

<平静な声>
あれがオーガ共の総大将か。
デカいし、腕の数も尋常じゃない。
ったく、幾らバケモノって言っても、あんなおぞましい形をしているものか。
まあ、僕の太刀ならば三度も斬り付ければ仕留められるな。
ふんぞり返ってるだけのボスは役に立たないって、教えてあげるよ。

<威勢良く太刀を振るいながら>
どうしたどうした！
何十本も腕があるのに、小娘の一撃すら満足に受けきれないかあ？
ほらほら、ちゃんと戦わないと、総大将の威厳が保てないよ！
あー、ごめん。
最後のお仲間、今斬っちゃった。

<内心の声　平静な演技>
随分と腕を切ったけど、まだまだ残ってるのか。
体力も魔力も問題は無いけど、このまま斬り続けても埒があかないな。

<威勢良く太刀を振るう>
だったら、殲影、八極、無限刃！（せんえい・はっきょく・むげんじん）
僕の全魔力を注ぎ込んだこの技で、粉々に刻んであげるよ！
腕に右脚、左脚、右脇腹、腕腕腕腕え！
それから、首ぃ！

<思いがけない手応えに驚愕する>
弾かれた！

あり得ない。
僕の太刀と競り合えるのは、同じ霧人の武器しかあり得ない筈。
何だ。あの残った腕が抱えているのは。

<我を忘れるような驚き>
それは、久遠の杖・・・・・。
おい、その杖をどこで手に入れた！

<力を失い、地面に崩れ落ちる。疲れきって震える声>
ぐっ。
そうだ、魔力も体力も使い切ったんだ。
がっ！
ちくしょう、離せっ！
くそっ！
汚い手で僕に触れるなっ！
かはっ。
まずっ・・・・・落とされる。
く、久遠。

<気絶状態から、性器を突っ込まれて目覚める>
んおおっ！？
なん、だ？
おおっ？
痺れが頭まで突き抜け、んほお！

<喘ぎと荒くなった呼吸がない交ぜになっている>
あっ、はあっ、腹の中が、掻き回されっ、んぐう！
はあっ、はあっ。
何？　この感触。
オーガの、鳴き声。
んうっ、まさか。
こ、この、バケモノ！
何してやがる！
ひっ、あぐっ！

ふざけんな！
抜けっ抜けえ！
おごっ！
抜けって言ってんだろおおっ！
抜けっ、抜いてっ、突くなっ！
んぶう、おっ！
ふうー、ふうー。
ちくしょう、身体が、言う事をきかない。
なんで、なんでこんな状況になってるんだ。
どうする、どうすればいい？
駄目だっ、痺れが、頭の中、ぐずぐずにじで。
ふぐうー。ふぐうー。
せめてっ、コイツに反応を見せないように、喘ぎ声だけはっ。
（歯を食いしばるが、堪えきれず喘ぐ）
んほおおっ。
おごおっ。
ちくしょう、ちくしょう。
ひぎっ、ひいっ。
覚えてろよお前。
この屈辱、ば、倍にして返してやるから。
はあっ、はあっ。
その汚い物を、先端から細切れにしていってやるからな！
うぐっ、オーガのアレが、熱を帯びて、震えて。

（絶頂複数回からの荒くなった呼吸）
あああああああっ！
っあっ！　ああっ！
おっ、ぐおっ。
ひい、ひい。

<気絶から目覚める>
うっ、うう。
ここは、どこだ？

<拘束されている事に気付いて、解こうと身じろぎする>
うっ！
手足が動かない？
縛られてるのか。
んん。
うぐっ。
んぐう！

<息を荒くして身じろぎする>
ぐっ。
ううっ！
このっ、なんでこんなロープが切れないんだよ！
うう、ううう！
（荒くなった息を深呼吸で整える）
落ち着け。落ち着け……。
パニクったら死ぬって、僕がいつも言ってた事じゃないか。
ふー。
（軽く身をよじる）
んっ。
んんっ！
このロープの色、探索用の強化ロープじゃないか。
所持品を漁られたのか。
マズいな。
この強化ロープは特殊な刃物じゃなきゃ切れないんだ。
……いや？
服がそのままなんだから、もしかすると装甲に仕込んだ隠し武器は。
よし、残ってる。
手首さえ自由になれば、逃げるのに三十秒とは掛からないが。
今逃げても、どうせすぐ捕まるだけだ。
この冷たい空気と不快な臭い。
オーガ共の巣、それもかなり深い場所だろう。
なぜ殺さず、拘束して巣穴に監禁した？
いっそ殺してくれれば、街の祭壇で再生できるんだが。
ちっ、霧人の弱点を知っているとでも言うのか。

バケモノのくせに生意気な。
魔力と体力、諸々が回復するまでは大人しくしているしかないが……。
こんな股を押っ広げた格好で地面に転がってなきゃいけないのか。
娼婦でも、こんな格好しないぞ。
おまけに拘束具に使われてるのは僕の太刀じゃないか。
屈辱だ。自分の武器を拘束の道具に使われて、こんな惨めな格好を強要されるとは。
霧人、いや人間にあるまじき恥さらしだ。
おまけに……。
痛っ。

（歯を食いしばった息遣い）
っつ、くっ。
やっぱ、アレは夢じゃないよな。
僕の初めてが、こんな。
久遠にあげるって決めてたのに、あんなバケモノなんかに。
許さない。
あの空っぽの頭が、絶望を知るくらいズタズタに切り裂いてやる。

（バケモノが姿を見せ息を呑む）
出やがったな、バケモノ。
ずいぶんとさっぱりしてるじゃないか。
自慢の腕を、殆ど斬られてどんな気分だ。
いや、斬ったというような手応えすら無かったけどな。

（腹を蹴られ、しばし噎せ返る）
バケモノ。
詰んでるんだよお前は。
もうじき魔力が回復して、本来の力を取り戻せる。
そしたら、すぐにお前を切り刻んで……うっ。
オーガのアレが剥き出しになってる。
なんだ、あの巨大で長い器官は。
表面に無数の突起が膨らんで、まるで金棒じゃないか。
あんな悍ましい物が、僕の中に……。

<怯えつつも威勢良く>
はあっはあっ。
ふざけるな、僕ら霧人はバケモノを孕みはしないんだよ！
突っ込んで掻き回すしか能の無い下等生物が。
存在価値を失わせて悪いけど、そんな事してる間に逃げた方が賢明だと思うけどね。
僕に恥を掻かせる度に、殺される時の苦しみが増えていくんだからさあ。
やめっ、パンツをずらすな！
くそっ、威嚇したところで、今の僕はコイツにとってオモチャでしかないのか。
ひっ、お尻の穴、爪でなぞられてっ？

（肛門にバケモノが指を突っ込み、不意打ちに悲鳴を上げる）
ひぎ！
指先が、お尻の穴をこじ開けてっ！
あっ。
あっ、がっ。
指が、お尻の穴の奥まで入り込んで！
やべろおっ（やめろお）
ぐっ、下劣なバケモノは、穴であれば何でも良いのか。
ひぎっ。
乱暴に、掻き回すなっ！

<息を荒らげながら>
ご、拷問のつもりか。
お尻の穴なんか、気持ちいわけないだろう！
ただ痛いのと、不快なだけでっ。
んんんうう！
うそ、でしょ。
イッた……？
お尻の穴なんか乱暴に掻き回されただけで、おしっこ漏らして？
違う、イッてなんかない。
ちょっと、電撃が、走っただけなんだから。

（荒く、速まった呼吸）
ぐっ、僕を仰向けにして何をする気なんだ。

あ？
それは、僕の太刀。
なんで柄頭をお尻に押し付けて・・・・・？
まさか、それをお尻に入れる気かあああああっ！
おごっ！
自分の武器、お尻に入れられっ。

<泣きながら暴れている>
ひぐっ！
やめろ、抜けえ！
僕の魂を、こんな事に使うな！
あっ、おおっ！
柄の些細な凹凸がっ、腸壁に痛痒い刺激を与えて、お尻の中を虐めてるっ！
なんで、こんなバケモノの乱暴な手付きでえ。
自分の武器で、お尻をほじられて、濡れてんだよ。
違う、コレは濡れたんじゃない。
違う違う違う。
んおおおっ！
柄の残りが一気に押し込まれてっ！
はあっはあっ。
あえ？
ま、待て、どこへ行く！
こんな格好のまま、放置だと！
抜け、抜けえ！
ぶち殺すぞ、おい！
聞いてるのかこの、薄汚い！

<猿轡を噛まされる>
なっ、んぐっ！

<内心の台詞>
鞘を、猿轡に？
こいつ、どこまで人を辱めたら気が済むんだ！

<猿轡の演技・ここから>
ふー、ふー。（身悶えし、必死で暴れている演技を五秒ほどお願いします）
<猿轡の演技・ここまで>

あいつ、本当に放置しやがった。
とにかく、お尻の柄を、どうにか出さないと、平静さなんて取り戻せない。

<猿轡の演技・ここから>
（柄を出そうと力む）
（柄が動く度に、快楽に苛まれる演技）
（柄を一気に出そうといっそう力むが、できず荒くなった息遣い）
（溢れ出る唾液を吸い上げる）
<猿轡の演技・ここまで>

何十分経った？
屈辱だ。
こんな下品な音を洞窟の中に響き渡らせて。
しかも、自分の武器をひり出して気持ちよさを感じてしまっている。
駄目だ。
少しの快楽も味わっては。
あんなバケモノの思い通りになっているなんて、僕のプライドが絶対に許さない。
あと、もう少し。

<猿轡の演技・いきなり戻ってきたバケモノに、柄を再び突き入れられる>
んぶううううう！（絶叫に近い喘ぎ）
<猿轡の演技ここまで>

せっかく出してたのに、また押し込まれてっ！

<猿轡の演技・柄を一気に引き抜かれ、再び絶叫する>
んぎいいいいい！
あーっ、はあっ、はあっ（力なく深呼吸）
<猿轡の演技ここまで>

ひ、引き抜かれた？
押し込んだ柄を、今度は一気に、引き抜かれて。
（猿轡を外されて、深呼吸する）
いっ、イッてない。
こんなお尻の穴で、イクわけがないんだから。
ひっ。
ちょ、ちょっと待て。
何をしている。
なんで、性器を近付けてくるんだ。
んあっ！
そんな物の先っちょで、お尻の穴をなぞるな。
太刀の柄でさえギチギチなのに、そんなのが入るわけないだろ。
イギっ！
そんな無理矢理！
やめろ！
やめろやめろ！
本当にぶっ殺すぞ！
かはっ。
ウゾ……、オーガのアレが、お尻の奥まで！
（今までよりひときわ荒い息遣い）
お尻の感覚がなくなる。
頭が、オーガのアレがお尻に入ってるんだって、理解しようとしていないっ。

（ひときわ強い喘ぎ声・ゆっくりと）
あぐっ！
おぐっ！
う、動くなあ！
動かれたら、内臓が、かき出されそうになるっ！
こ、壊れる。
お尻を、壊される！
あっ、おっ！
んおおおっ。
ちくしょう、もう、喘ぎ声を抑えられなくなってる。

尻の奥から身体を一直線に突き上げる快感が、口を開けば声になって漏れ出てしまう。
んぐっ、おっ！
激痛から逃れる為に身体が感覚を麻痺させたせいでっ。
口も開きっぱなしで、閉じる事ができない。
コイツ、僕が感じている事に気付いて、昂ぶらせてやがる。

（喘ぎ声・十秒ほど掛けて、中速から徐々に速く）
ピストンの速度が、速くなって。
オーガの、ペニスがびくびく震えて。
あああああああああっ！
オーガの精液、お尻の中に注ぎ込まれてっ。
あ、あふっ。
いひぃ。
や、ヤバイ。
オーガ種の精液は、身体を発情させるって・・・・・。
サキュバスが、希釈して薬液に使うとか聞いた事があるぞ。
そんな物を直腸に留めていたら。
いくら霧人って言っても、発情しっぱなしになる。
はあっ、はあっ。
乳首とクリが、服の中でこすれて。
こんな大きく膨らんで・・・・・？
冗談だろ。
まだ出された直後なのに、もう発情の効果が出始めてるだと・・・・・。
あぐっ！
また動き始めてっ。
（二十秒ほど、ピストン運動に喘ぐ）
はあっはあっ。
ひいっ、乳首がっ。
着物ごと摘ままれて、おっぱいが伸ばされる。
乳首つねられると、快感が。
知ってる快感が、麻痺した身体の感覚を再起動させちゃって！
お尻の中を動き回るオーガのアレの動きも、不快感も伝わってくるっ！
おおっ。
表面のイボが腸壁をゴリゴリってするたびにい。

身体の隅々に不快感と、催淫効果のある精液が擦り込まれていくようでっ。
快楽でっ、もう、何も分からなくなってくる。
あぐっ、おっ、んぶ、ぐう、あっあっあっあっ（徐々に速まる喘ぎ声）
この、喘いでる声。
こんな女々しい声が、僕の物なのか。
この下半身を貫く感覚、これは僕の物なのか。
違う。
こんな、お尻の穴をほじくり返されて、媚びるような喘ぎを、僕が。
イグッ、イグッ！
（泣きじゃくりながら深呼吸）
はーっ、はあーっ。おごっ（性器を引き抜かれ、軽く喘ぐ）
お、お尻から、引き抜かれて……。
は、速く精液、出さなきゃ。
（腸内の精液を出そうと力む）
（再び精液を出そうと力を込める。先ほどより、すこし力むのが長い）
（三度目の力み。二度目と同じ長さで、しかし精液を排出できず呼吸が荒くなる）
ダメだ、力が入らない。
この精液、粘度みたいにドロドロして、へばりついてる。
何かで掻き出さなきゃ、少しも出てこない。
太刀を拾い上げて何を。
ひぎいいいっ！
柄を突っ込まれて。
鞘もっ！？
あぐっ、お尻の栓、だと。
しかもロープで、尻穴に固定されてる。
やめろ！
解け！
ひぐいっ。
身じろぎすると腸内で柄と鞘がぶつかり合ってえ。
音だけで快楽が身体の中を駆け巡っていくっ！
はーっ、はーっ。
この精液、おっ。
体内に入れておくとっ、んぐっ。
再現無く快楽中枢を犯してくる。

やむを得ない。
ここは、回復した魔力を使って脱出を最優先にしよう。
このままだと、そよ風が肌に触れただけでイキっぱなしになってしまう。
・・・・・・え？
回復していた筈の魔力が、無い。
そんな馬鹿な。
まさかこの催淫効果、魔力を吸収して生成されていくのか？
じょ、冗談じゃない。
それじゃあ精液を注ぎ込まれるだけで、僕の能力は封じられるって事じゃないか。
ひっ！
だ、誰か助け。

<性器を咥えさせられる>
んぶう！
さっきまでお尻に入ってた物を！
んぶっ、じゅる。
おえっ。
んぐ、んぐう！
こんな、臭くて汚い物を咥えさせられてるのに。
舌が勝手に、性器を隅々まで舐め取ろうとしてる。
味蕾の一つ一つが、性器の味に刺激を感じて、舌まで気持ちよくなってるっ。
（下品フェラ・十秒ほど）

こんなの孕み袋ですらない。
性処理と性器の掃除道具も同然に使われてるのに。
身体はどんどん敏感になって、悦んでるのを隠そうともしない。
全部、精液の、催淫効果のせいだ。
身体が、女としての本能が意識から分離して、勝手に精液を求めてるんだ！
ううぐ。
（精液を飲み干す）
胃にまで、精液を流し込まれて。
（口から性器を引き抜かれる）
んぐっぼおっ。

ごほっ、ごほっ。
口なのに、性器を引き抜かれただけで、軽イキしてしまう。
あう・・・・・あぁ。
舌が頬の内側に触れただけで、快感が、酷い事になるっ。
こんな舌を垂らしたまま、口を閉じる事もできない顔なんて。
まるで、媚びてるみたいじゃないか。
（意に反する、媚びるような深呼吸・五秒ほど）
この程度で（深呼吸）僕が、屈服するとでもっ、思ったか。
はあっ、はあっ。
お前らバケモノに、僕らの心は壊せない。
今すぐにでも、お前を切り刻んで、見せしめにしてやりたいくらいだよ。

<拘束されたまま吊られ、突き上げられている>
あがあああああああっ（絶叫のような絶頂）
おっ、いいいっ（絶頂の余韻、オホ声でお願いします）
また、また中に出された。
何発出せば、コイツは大人しくなるんだよお！
何度も中に出されて、飲まされて。
妊娠なんかしてないのにっ。
中に出された精液だけでお腹が、三倍近くに膨らんじゃって。
ああっ。
精液を出される度に身体が敏感になって、全身が、快楽だけを感じ取る器官になっていくのが分かる。
んぎいいいい！
前に入れてる時にい、お尻の太刀と鞘を弄るなあ！
腸内で固まってた精液が攪拌されて、おごっ。
催淫ガスが腸内を満たしちゃうからあ！
柄と鞘の隙間からガスが漏れて、その音だけで脳が痺れるっ！
もう、ここの空気。
僕の排泄した、催淫ガスの濃度が高くなってるんじゃないのか？
催淫ガスが肺の血管に溶けて。
もう快楽漬けにされてない臓器なんて無いんじゃ。
んおおおおおっ！（オホ声）
また、動き始めた。

もう、もうお腹の中、一杯で精液なんか一滴も入らないのにっ。
コイツが少し動くだけで全身が痙攣して、意識が身体から剥がれ落ちそうになる。
なんで、妊娠させられないと分かってる筈の雌を、こうも嬲るんだ。
まさかコイツ、僕をイかさせ続けるのが目的なのか。
んおっ、イグっ、イグううううう！
あっ、あへぇ（絶頂後の放心状態）
んぶう！（即座に前後運動が始まり、意識が引き戻される）
ひっ、ひぎっ、えあああ（脱力した喘ぎ声・十五秒ほど）
何分？
何時間？
それとも、何秒も経ってない？
分からない。
頭の中ぐずぐずになって、考える気も起きなくなってる・・・・・・。
ダメだ、気をしっかり持たないと。
いけないのに。
無理いいいい！（悲鳴じみた絶頂声）
堪えられるわけない。
快楽への感度を何十倍にも上げられて。
ひぎっ！
何十回も犯されるなんて、堪えられるわけない。
ご、ごご、ごめんんなざいい！
<早口での懇願・ここから>
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。
僕が悪かったから、もお許して。
もお入らないから。
これ以上、精液注がれたら、快楽で頭まで破裂しちゃうから。
お願い。
殺すなら、ちゃんと殺して。
<早口での懇願・ここまで>

いやあああああ！
もお犯さないでっ。
許してよお！

<猿轡の演技・ここから>
んぶ、んご、んぐぅ（寝息）
うっ、んうう？
ふーっ、ふう（深呼吸）
僕は、何を。
んぐっ、ううん！（条件反射で身じろぎをしている）
<猿轡の演技・ここまで>

吊されたまま放置か。
くっ。
わざわざキツく縛り直して、猿轡まで噛ませてるとは。
冷たい、静かな空気。
明け方か。
どれだけ気絶していたのか、考えるだけ無駄か。
アイツは、今は居ない。
これだけ頑丈に縛り付けたってことは、しばらく戻ってこないだろうけど。
くっ。
このお腹。
あれから何回、精液を出されたんだっけ。
魔力は、回復する素振りすら見えない・・・・・・。
は・・・・・・？

<猿轡の演技・ここから>
んおおおおおお！（悲鳴）
<猿轡の演技・ここまで>

なん、だ。
あそこが、うずいてる？
お尻の穴も、口の中も。
酷く痒くて、気持ち悪くて、物足り・・・・・・ない？
催淫効果が、働いてるんだ！

<猿轡の演技・ここから>
<精液をひり出そうと力んでいる>

んぐっ、ふう！
ひふーっ！
んぶっ！
ふぶううう！
んおおおおお！
<猿轡の演技・ここまで>

だめだ。
精液、固まって全然ひり出せない。
乳首もクリも、どんどん大きくなって。
服と擦れてるけど、こんな刺激っ！
オーガのアレには、はあっ、はあっ、チンポの刺激にはぜんぜん及ばない！
むしろなまじ刺激されるせいで、全部の穴がもどかしさでひくひく震えてる。
前も後ろも、口も。
あの鋼のようなオーガのチンポでずぼずぼされないと、僕の身体はもう存在すら確立できなくなってる。
ああーっ。んおおお（猿轡での呻き声）
もう、我慢できない。

<猿轡の演技・ここから>
<隠し武器でロープを切っている>
んっ！
ふっふつふっ。
んぎっ。
ふっ、ふう。
んううっ！（ロープが切れて地面に落ちた）
ふーっ、ふーっ（深呼吸）
<猿轡の演技・ここまで>

ほ、解けた、けど。
っ、長時間縛られていたせいで手足の感覚が。
肥大化した腹のせいで、バランスも取りにくいし。
いや、そんな事どうでもいい。
はあっ、はあっ（荒くなった呼吸）

なにか、身体のうずきを抑えられる物は。

<猿轡の演技・ここから>

<自慰をしている>

ふっふっふっふっ。

んぐ。

ふっ！

んふっふっふっふっ。

あっ、ああっ、もっと、もっと。

<猿轡の演技・ここまで>

自分を慰められそうな物は、僕を縛めていた太刀しか無かった。

女神様から与えられ、僕の誓いが擦り込まれた、何よりも大切な武器だ。

今の僕には体液を垂れ流す穴を埋める、オーガちんぽの代替物でしかない。

鞘と柄を二つの穴に突っ込んで、自分の手で穴を掻き回す。

足りない。

太さも長さも勢いも。

むしろ自慰をすればするほど性衝動が強まっていたが、手を止める事はできない。

イキたい、イキたい、イキたい！

誰でも、何でも良いから。

僕の穴を。

お願いお願いお願いお願い。

……あっ。

いつからそこに居たのか。

オーガがこちらを見下ろしていた。

その腹には、白い物体が縛り付けられ、甲高い音を発していた。

久、遠？

それは、この世界に来てずっと冒険していた、僕の。

初恋の人。

お前、やっぱり久遠、をっ？

オーガはゆっくりと歩み寄ってくると、久遠から引き抜いたチンポを僕の前に差し出した。

はーっ、はーっ（興奮した荒い呼吸）

記憶よりも大きく見えるチンポ様。
その酷い臭いを嗅いだ瞬間。
僕は二つの穴に入れていた太刀を引き抜くと、遠くへ投げ捨てていた。
ああっ、オーガ様。
お願いします。
僕のオマンコ、もおあなた様のオチンポが欲しくて限界なんです。
ケツ穴も口も、あなた様に頂いたセックスの味が忘れられなくてっ。
あんな太刀じゃ慰められないんですう！
妊娠しないこんな身体ではお役に立てないと思いますが、その肉鎧共々性処理便器としてお役に立ちますから。
どうかお慈悲を僕のオマンコ、ケツマンコでもいいので。
お願いいたします。
ああああっ！
オチンポ様あ！
い、入れられただけでイッちゃったあ。
これっ、この太さ、刺激ぃぃぃ！
ああああっ、ありがとうございます！
僕に真の職業をっ。
精液を搾り取る便器という本当の役目を教えてくださったこと、感謝いたします！
愚かにもあなた様に刃向かって、大切なお仲間を屠った罪。
この身を尽くしてお詫びいたしますう！
ひひっ、あはははっ！
興奮と快楽、涙で霞む視界の中で、久遠が必死に首を振っているのが見えた。
久遠、あははっ久遠！
僕も、オーガ様のチンポに絡み付く便器になれたよ！
一緒に、一緒の存在になれたね！
あーっ、はあっ（荒い深呼吸）
もう、使命だとか元の世界に戻るだとか、どうでもいい。
ここには久遠が居るし。
なによりこんなオチンポ様、他では味わえないのだから。
さよなら。
つまらない世界。